

カビール『ビージャク』和訳余滴(4)

——ワサント——

橋 本 泰 元

はじめに

本稿は前稿に続いて、既刊の拙訳『宗教詩ビージャク—インド中世民衆思想の精髓』（平凡社「東洋文庫」703、2002年）において、いくつかの理由によって省略した部分、すなわち第2番目の「サバド」（正師のことば）の後半に置かれており、バナーラス市以東でビハール州西部地帯の民衆の歌謡の形式で著わされているとされている詩篇8箇のうち、第4番目の部分をテキストを示して翻訳したものである。

なお各々ワサントの番号は底本のものである。なお訳注略号等は、上記拙訳書を参照頂きたい。

サバド 5 ワサント

sabada 5 vasanta

(1)

jāke bāraha māsa vasanta hoyā / tāke paramāratha būjhai biralā koya //

十二ヶ月が春である、その真実義を稀なる人しか理解できず。

barasai agini akhaṇḍa dhāra / hariyara bhau bana aṭhāraha bhāra //

火が不断の流れとなってあめふり、新緑が十八パールの森となった。

〈注〉「パール」とは、HSSなどの辞典によれば竹製の天秤棒の両端に担げる荷物の重さの意味であるが、意味が通じない。BTMは宗派内の伝統的解釈に従ってたいへん大きな単位の数と理解しており、BPPはすべての植物の意味に理解している。いずれにせよ、文脈から判断すれば、この一行の後半

は「新緑がたいへん大きな森となった」という意味に考えられる。

paniyā ādara dharani loya / pauna gahai kasa malina dhoya //
人々は水を大切に保持し、風を捉えて〔身体の〕垢を払い落とす。

binu taravara phūle akāsa / siva virañca tahaṃlei bāsa //
樹がなくても虚空に華が咲き、シヴァ、ブラフマーはそこに住す。

sanakādika bhūle bhaṃvara boya / lakha caurāsī joina joya //
サナカ四人兄弟は蜂〔の如くその〕香に〔我を〕忘れ、八四〇万のヨー
ニに墮ちる。

〈注〉後半句のjoyaは辞典によれば「妻」の意味だが、文脈から「墮ちる」と訳した。

jo tohi satagura sata lakhāva / tate na chūṭe carana bhāva //
おまえに正師が真実を示したならば、それによって〔正師の〕御足への
帰依の念は止むことなし。

amara loka phala lāvai cāva / kahahi kabīra būjhai so khāva //
不死なる世界の果報を得ようと熱望せよ、カビールはいう、〔それを〕
理解すれば〔果報を〕得られる。

(2)

rasanā paṛhi lehu srī vasanta / bāhūrī jāya parabehu jama ke phanda //
舌を〔使って〕読み吉祥なる春をつかめ、〔さもなくば〕再びヤマ（閻魔）
の罠に墮ちよう。

〈注〉前半句の意味が難解であるが、BTMは「舌を使ってラームの名号を念誦し
至高の境地を獲得せよ」と解釈している。

merūḍaṇḍa para ḍaṅka dīnha / aṣṭa kaṃvala paracārī līnha //
〔ヨーガ行者は〕背骨に針を刺し、八蓮華を輝かした。

〈注〉諸注釈書の解釈によれば、ハタ・ヨーガの行者は、脊椎の会陰部に潜在しているエネルギーであるクンダリーニを行法によって覚醒させ、脊椎内部に想定された中央脈管スシュムナー内と途中にある蓮華として象徴される神経叢（チャクラ）を通過させて、頭頂あたりに想定されるブラフマ・ランドラ（「梵の洞穴」）に到達せしめる。すると、男性原理であるシヴァ神と女性原理であるクンダリーニの冥合が成就し、不断の光輝が発するとされている。

brahma agina kiyo paragāsa / aradha uradha tahaṁ bahai batāsa //

ブラフマンの智火が発し、下方と上方の氣息がそこに流れる。

〈注〉BTMは、ハタ・ヨーガの行法の次第からすれば、この一行の前半と後半の句は書写生によって誤記されたと解説している。後半句の意味は、調息法によって吸気と呼気と一緒になった状態、すなわち呼吸が非常に安定した状態を述べている。

nau nārī parimala so gāṁva / sakhī pāṁca tahaṁ dekhana dhāva //

九人の女は芳香の堆積〔をなし〕、五人の女友達がそこを見ようと急ぐ。

〈注〉諸注釈書は、「九人の女」を九本の脈管、「芳香の堆積」を真我（アートマン）、「五人の女友達」を「色・声・香・味・触」という五知覚器官の対象、あるいは五知覚器官そのものの意味と解釈している。

anahada bājā rahala pūri / tahaṁ purakha bahattara khelaiṁ dhūri //

奏でられざる音が響き渡り、そこで七十二の結節をもつ男が色粉遊びをする。

〈注〉BTMは、二元の合一によってヨーガ行者には世界の根源音（ナード）が聞こえ、それによって行者は歓喜にうち震え恍惚となると解釈している。後半句の「色粉遊び」は、春の到来を喜ぶホーリー祭に祝われる遊びである。

(40)

māyā dekhi kasa rahyo hai bhūli / jasa vanasapati rahi hai phūli //
〔世間の人は〕マ－ヤー（現象世界）を見てなぜ誤っているのか、植物が〔刹
那だけ〕花咲いているかのようだ。

kahai kabīra yaha hari ke dāsa / phaguvā māṅgai baikuṇṭha bāsa //
カビールは言う、このハリ（神）の奴僕は、春祭りの返礼としてヴァイ
クンタ天界での居住を望む。

(3)

maiṁ āyo mestara milana tohiṁ / ritu vasanta pahirāvahu mohiṁ //
私は来た、偉大な人（神）よ、汝に会いに。春の季節〔の装い〕を私に
着せよ。

lāmbī puriyā pāi china / sūta purānā khūṇṭā tina //
長い経糸、〔それを張る〕細い籐枠、紐は古く釘は三本。

sara lāge tehi tina sai sāṭha / kasani bahattara lāgū gāṇṭha //
そこに三百六十本の葦茎を付け、縛って七十二個の結び目を付ける。

khurakhura khurakhura calai nāri / baiṭhi jolahina palathī māri //
カラカラ、カラカラと〔緯糸を通す〕杼が動き、ジュラーハー（織工）
の女がどっしりと座っている。

ūpara nacaniyāṁ karata koṛa / karigaha māṁ dui calata goṛa //
上で紡錘が踊り、織機のなかの二本の足〔踏み板〕が動いている。

pāṁca pacīso dasahuṁ duāra / sakhī pāṁca taham racī dhamāra //
五、二十五、十の門、五人の女友達がそこで騒ぎを起こす。

〈注〉諸注釈書によると、「五」は地・水・火・風・空の五大元素、「二十五」は根本原質（ブラクリティ）から開展する二十五原理、「五人の女友達」は五知覚器官の意味である。「騒ぎ」の原語には、春祭りのホーリーに歌われるダマールという民謡の意味もある。

raṅga birāṅgī pahirai cīra / hari ke carana dhai gāvai kabīra //
 様々な色の衣服を着て、カビールはハリ（神）の御足に額づき〔讃え〕詠う。

(4)

buṛhiyā haṁsi boli maiṁ nitahiṁ bāri / mose taruni kahu kauni nāri //
 老婆が笑って言った、私はつねに乙女。私より若い女がどこにいる。

dānta gaye more pāna khāta / kesa gaye more gaṅga nahāta //
 パーンを噛んで私の歯はなくなり、ガンガー川で沐浴して髪もなくなった。

〈注〉「パーン」は、新鮮なキンマの歯の裏側に暗褐色の阿仙葉の濃い水溶液（カッター）と水に浸した消石灰（チューナー）を塗り、細かく刻んだビンロウジュの実を三角形に包んだ、口中清涼のための嗜好品。

naina gaye more kajarā deta / bayasa gaye para purakha leta //
 眉墨を塗って眼がなくなり、他人の男と交わって歳もとった。

jāna purakhavā mora ahāra / anajāne kā karaṁ siṅgāra //
 男たちの命が私の食物、無知なる者のために私は化粧をする。

kahahi kabīra buṛhiyā ānanda gāya / pūta bhatārahim baiṭhi khāya //
 カビールは言う、老婆は歓喜〔の歌〕を歌って、息子と夫を貪り喰らう。

(5)

tuma bujha bujha paṇḍita kauni nāri / kāhu na byāhali hai kumāri //
 おまえ理解せよ、理解せよバンディット（学僧）よ、〔この〕結婚せずに未婚の女は誰だ。

saba devana mili harihiṁ dīnha / cāriu juga hari saṅga līnha //
 すべての神々は一緒になってハリ（神）に〔この女を〕与え、四ユガ（劫期）のあいだハリは一緒にいた。

(42)

prathama padumini rūpa āhiṃ / hai sāmpini jaga khedi khāhiṃ //
最初に〔この女は〕パドミニ（蓮華女）としてやって来て、蛇女となっ
て世間〔の人々〕を追いかけて食い尽くす。

ī bara jovata ū bara nāhiṃ / ati re teja triyā raini tāhiṃ //
〔この女は〕この花婿、あの花婿といって探すが見つからず。彼女〔の欲望〕
の輝き〔はいや増し〕夜は更ける。

kahahi kabīra ye jagata piyāri / apane balakabahim rahala māri //
カビールは言う、この女は世間にとって愛しいが、自分の子供たちを殺
していた。

(6)

māi more manusā ati sujāna / dhandha kuṭi kuṭi karata bihāna //
母よ、私の夫はとても良い人、米を搗いて翌朝まで仕事をする。

baṛe bhora uṭhi āngana bāḍhu / baṛe khāñca le gobara kāḍhu //
夜明けに起きて庭を掃除し、大きな籠をもって牛糞を集める。

bāsi bhāta manuse lihala khāya / baṛā ghaila liye pānī ko jāya //
残った米飯を喜んで食べ、大きな甕をもって水を汲みに行く。

apane saiṃyā kī maiṃ bāndhugī pāṭa / lai becūṃgī hāṭe hāṭa //
私は、主人の服を着て、市場から市場へと売って歩こう。

kahahi kabīra ye hari ke kāja / joiyā ke ḍhika rahi kauni lāja //
カビールは言う、これはハリ（神）の所業。女には何の恥じらいもなし。

(7)

gharahi meṃ bābūla bāṛhali rāri / uṭhi uṭhi lāgai capala nāri //
旦那よ、家に諍いが増えた。性悪女が〔諍いを〕 ことあるごとに始めた。

eka baṛī jāke pāñca hātha / pāñcom ke pacīsa sātha //

一人の年増女には五本の手があり、〔その〕五本に二十五〔本の手が〕ある。

pacīsa batāvaiṃ aura aura / aura batāvaiṃ kaika ṭhaura //

二十五よりもっと多くあるといい、他〔のもの〕は別の場所を教える。

antara madhye anta lei / jhakajhorī jhorā jīvahim̐ dei //

〔その女は〕内・中・後に連れて行き、個我を揺さぶりうちのめす。

āpana āpana cāhaiṃ bhoga / kahu kaise kusala parihaiṃ joga //

自ら享樂をのぞんで、言ってみよ、どうして巧くヨーガを修せようか。

viveka vicāra na karai koya / saba khalaka tamāsā dekhaim̐ loya //

分別・熟考をする者なく、世間の人はみな見世物を見る。

mukha phāri ham̐se rāva rañka / tāte dharai na pāvai eko añka //

王侯・貧者は大口を開け笑い、そのため要点をひとつも得ず。

niyare na khojai batāvai dūri / cahum̐disi bāguli rahali pūri //

近くを探さず遠くに〔ある〕と言ひ、四方にあまねく〔罫の〕網が広がっている。

lacha aherī eka jīva / tāte pukārai pīu pīu //

何十万もの獵師にひとつの個我、そのため〔個我は〕助けてと哀願する。

abakī bāra jo hoyā cukāva / kahahi kabīra jāko pūri dāva //

たった今〔感官の享樂を〕止めれば、カビールは、その技は成功だと言う。

(8)

kara pallava ke bala khele nāri / paṇḍita hoyā so lei vicāri //

手の指の力で女はもてあそぶ。パンディットならば、それを考えてみよ。

(44)

kaparā na pahire rahe ughāri / nirjiva se dhani ati piyāri //
衣服を着ずに裸でおり、女は非情（物）にとっても執着する。

〈注〉諸注釈書は「女」を「マーヤー（幻力ないし現象世界の質料因）」と解釈している。

ulaṭī palaṭī bājū tāra / kāhū mārāi kāhu ubāra //
上へ下へと手拍子をならし、誰かを殺し誰かを救う。

kahai kabīra dāsana ke dāsa / kāhū sukha de kāhu nirāsa //
奴僕のなかの奴僕カビールは言う、〔その女は〕誰かに楽を与え誰かに絶望を与える。

(9)

aiso duralabha jāta sarīra / rāma nāma bhaju lāgu tīra //
このような得難い身体がなくなってしまう、ラームの名号を念誦して彼岸に達せよ。

gaye benu bali gaye kaṃsa / durajodhana ko būṛo baṃsa //
ヴェーナとバリは逝き、カンサも逝った。ドゥルヨーダナは家系を潰した。

prithu gaye prithamī ke rāva / tiravikarama gaye rahe na kāva //
プリトゥヴィーの王プリトゥは逝き、三步で世界を闊歩した侏儒（ヴァーマナ）が逝き、誰もいなくなった。

〈注〉『バーガヴァタ・ブラーナ』によれば、「ヴェーナ」はアンガ王とスニーター妃の子として生まれたが、性悪で遊んでいるとき子供たちをいじめ、動物を矢でむやみに殺していた。アンガ王は彼を諭したが失敗し、性悪息子より血筋途絶のほうがましだと考えた。しかし、暫くして王は考え直して出家を思い立った。ある夜、王はすべてを棄て森に旅立った。大臣や帝師らは、ヨーガの本質を知らない人びとが自分の心にひそむ真実在をそとに探しているかのように、森に王を探し歩いた（4.13.48）。しかし、結局、王を見つ

けることはできなかった。

帝師たちは大臣たちの同意を得ないで、王国に混乱が拡がらないようにとヴェーナを王位に就けた。しかしヴェーナは王位に就くと増長し、臣民を苦しめるようになった。そこで、ブラーフマン（バラモン）たちは彼を誅殺した。王が不在となり再び臣民のあいだに混乱が生じたので、学僧たちは「ヴェーナには子供がいない。ブラーフマンたちが殺してしまった。彼の遺体が横たわっている」といって妙案を考え出した。彼らはヴェーナの太股を擦ると真っ黒い男児が出てきた。ブラーフマンたちがその男児に「座れ」（サンスクリット語で「ニシーダ」）と命じたので、その男児は「ニシャーダ」と呼ばれるようになった（4.14.45）。それから、ニシャーダというジャーティ（民族）が生まれた。さらにブラーフマンたちがヴェーナの腕を擦ると、アルチという女兒とプリトゥという男児が生まれた（4.15.1-2）。プリトゥは信仰心が篤かったので、ブラーフマンたちは彼を王位に就けた。

プリトゥが王位に就いた時、臣民は飢饉に苦しんでいた。プリトゥ王は大地の女神プリトゥヴィーに穀物を産み出すよう命じた。しかし、プリトゥヴィーはその言葉に気を払わなかった。プリトゥは怒って矢を番えた。するとプリトゥヴィーは雌牛となって逃げた。ところがどこにも避難できなかったので、結局プリトゥの許に庇護を乞うた。それからプリトゥはスヴァーヤンブヴァというマヌ（人始祖）を仔牛に変えて、雌牛となっているプリトゥヴィーから穀物や薬草を搾り出した。プリトゥ王は、その後、百回、馬祀祭（アシュヴァメダ・ヤジュニヤ）を執り行った。そして後に、王は苦行を行い他界した（4.15-23）。

王バリは、祖父ブラフラーダ、父ヴィローチャナの子で布施の善業を積み、厳しい苦行の結果、天界の将インドラを凌ぎ三界を支配するに至り、神々を恐怖に陥れた。神々はヴィシヌ神に保護を求めたので、ヴィシヌ神は侏儒（ヴァーマナ）となってバリの前に現れ、三步分の土地を請うた。バリは侏儒の姿を見て安心して、それを認めた。するとヴァーマナは忽ち巨大な姿となって二歩で天と地を取り戻し、もう一歩で全世界を支配しようとした。しかし、バリの親切心とブラフラーダの徳行に免じて地界をバリに残してやった。

カンサはマトゥラー国王ウグラセーナの正嫡であった。彼は父王の敵対者マガダ国王のジャラーサンダのアスティ、ブラープティという二人の娘

と婚姻を結び、ジャラーサンダの支援を得て父王を廃位して牢獄に繋ぎ自ら王位に就いた。ヤドゥ族の首領クリシュナの改革的な精神に常に怯え、最後にはクリシュナに誅殺された。

ドゥルヨーダナは、『マハーバーラタ』のカウラヴァ百王子の長で、従兄弟同士の骨肉の争いでバーンダヴァ五王子に敗れた。

chau cakave maṇḍali ke jhāri / ajahuṃ ho nara dekhu vicāri //

六人のチャクラヴァルティー（転輪王）は領土を失った。さあ人間よ、考えてみよ。

haniata kasyapa janaka bāli / ī saba chekala jama ke duāri //

ハヌマーン、カシュヤパ、ジャナカ、ヴァーリ、これら全員がヤマ（閻魔）に囲まれた。

〈注〉ハヌマーンは、『ラーマヤナ』に登場する猿将であり、ラーマ王子を羅刹成敗でたいへんな支援を行った。ジャナカは、ラーマ王子の妃スィーターの父でありミティラー国王で哲人でもあった。ヴァーリは、ラーマ王子の妃スィーターが羅刹ラーヴァナに誘拐されとき、ラーマを助けてスィーターを救出した猿王スグリーヴァの兄。兄によって王国を追放されていたスグリーヴァは、ラーマと協約し、ラーマ王子の支援を得たヴァーリによって殺された。

カシュヤパは、ヴェーダやブラーフマナ聖典に登場する偉大な聖仙・帝師である。『マハーバーラタ』やブラーナ聖典の伝承では、ブラフマー神の人間の六人の息子たちの一人マリーチが自己の意欲の力で生んだ息子がカシュヤパである。カシュヤパはダクシャ・プラジャーパティの17人の娘と結婚したと伝えられているため、広い意味をもつゴートラ（種姓）であるので、ゴートラのない個人のゴートラとして見なされている。

gopīcanda bhala kīnha joga / jasa rāvana māryo karate bhoga //

ゴピーチャンドは勝れたヨーガ行を修し、ラーヴァナは享楽に溺れて死んだ。

〈注〉ゴーピーチャンドは、ハザーリーブラサード・ドヴィヴェーディーらによる、主に古ベンガル語の『ゴーピーチャンドの歌』(*Gopīcandergān*) などナート派文献の研究によれば、11世紀ころのベンガル地方の王で、母の勧めで二人の妃を棄てて出家しナート派のスイッタ(成就者)ジャーランダラ・パーダの弟子カーンハ・パー(クリシュナ・パーダ)に師事した。

aisī jāta dekhi nara sabahiṃ jāna / kahahi kabīra bahju rāma nāma //
 このように人みな命が逝ってしまったのを見て、カビールは言う、ラー
 ムの名号を念誦せよ。

(10)

sabahi madamāte koī na jāga / saṅgahi cora ghara mūsana lāga //
 人みな酔い痴れ誰も覚めず、同時に盗人が家々に盗みに入る。

jogī mātē joga dhyāna / paṇḍita mātē paṇḍi purāna //
 ヨーガ行者はヨーガ・静慮に酔い痴れ、パンディット(ヒンドゥー教学僧)
 はプラーナ聖典を読んで酔い痴れた。

tapasī mātē tapa ke bheva / sanyāsī mātē kari ahameva //
 苦行者は苦行の秘密に酔い痴れ、出家遊行者は「我こそは」といって酔
 い痴れた。

maulāna mātē paṇḍi musāpha / kājī mātē dai nisāpha //
 マウラーナー(イスラーム教学者)は聖典クラーンを読んで酔い痴れ、
 カーズイー(イスラーム法官)は正義を説いて酔い痴れた。

saṃsārī mātē māyā kī dhāra / rājā mātē kari haṃkāra //
 世間の人(マーヤー(幻力)の流れ)に酔い痴れ、王侯は自尊心に酔い痴れた。

mātē sukadeva ūdhava akrūra / hanivanta mātē le laṅgūra //
 シュカデーヴァ、ウッダヴァ、アクルーラは酔い痴れ、ハヌマーンは己
 の尻尾に酔い痴れた。

〈注〉 シュカデーヴァ仙は大叙事詩の作者ヴィヤーサの息子で、『バーガヴァタ・ブラーナ』の語り手であり大学者とされている。ウッダヴァは『バーガヴァタ・ブラーナ』によればクリシュナの親友でヤドゥ族の宰相である。アクルーラも『バーガヴァタ・ブラーナ』によれば、クリシュナの帰依者であるのに、クリシュナの叔父である悪王カンサの使者となってクリシュナとその兄バララーマを罠にかけて殺そうとする企てに荷担した。

siva mâte hari carana seva / kali mâte nāmā jaideva //

シヴァ神はハリ（ヴィシュヌ）神の御足の奉仕に酔い痴れ、カリ（末法の劫期）にナーム（デーヴ）とジャエデーヴは酔い痴れた。

〈注〉 ナームデーヴについては、『宗教詩ピージャク』解説1「カビール思想の歴史的背景」、とくにpp.282-3を参照。ジャエデーヴ（Skt.ジャヤデーヴァ）は12世紀ベンガル地方のセーナ王朝の宮廷詩人でサンスクリット語の美文体でクリシュナとラーダー姫の美しい恋愛詩『ギータ・ゴーヴィンダ』（*Gītagovinda*）を著した。

sata sata kahai sumriti beda / jasa rāvana māreu ghara ke bheda //

法典、ヴェーダは真実を語っている。ラーヴァナが家の内紛で死んだように。

〈注〉 この後半句は前行までの例証であり、『ラーマーヤナ』によれば、ラーヴァナの弟ヴィビーシャナは、スィーター姫を誘拐した兄を正しい道に戻そうとして、スィーター姫奪還の戦でラーマ王子に味方した。

cañcala mana ke adhama kāma / kahahi kabīra bhaju rāma nāma //

浮ついた心の^下卑^劣な欲望。カビールは言う、ラーマの名号を念誦せよ。

(11)

siva kāsī kaisī bhaī tumhāri / ajahuñ ho siva lehu vicāri //

シヴァよ、汝のカーシーはどうなった、今、シヴァよ、考えてみよ。

covā candana agara pāna / ghara ghara sumrita hoyā purāna //
香料、白檀、線香、パーン、家々で法典やプラーナ〔の講釈〕が行われ
ている。

bahu vidhi bhaune lāgu bhoga / aiso nagra kolāhala karata loga //
たくさんの種類の供物を捧げ、人びとはこの街で喧噪を起こしている。

bahuvidhi parajā loga tora / tehi kārana cita dhiṭha mora //
汝には多様な信者がおり、そのために私の心も図々しくなった。

hamare balakavā ke ihai gyāna / toharā ko samujhāvai āna //
私の知識は子供のもののよう、〔しかし〕汝にはかに誰が言って聞かせ
ようか。

jo jehi mana se rahala āya / jiva kā marana kahu kahāñ samāya //
様々な気持ちで人びとは〔ここに〕やって来て住んでいる、個我は死ん
でどこに納まるのか、言ってみよ。

tākara jo kachu hoyā akāja / tāhi dosa nahiñ sāhaba lāja //
彼らになにも利益がなければ、それは〔汝の〕欠点でもなく恥でもない、
主よ。

hara harasita soñ kahala bheva / jahāñ hama tahāñ dusarā na keva //
ハラ（シヴァ）は喜々として内密を話した、私がいるところに他の者は
いない〔と〕。

dina cāri mana dhrahuñ dhīra / jasa dekhai tasa kahai kabīra //
四日の間心で辛抱せよ、カビールは見たように言う。

(12)

hamare kahala ke nahiñ patiyāra / āpa būre nara salila dhāra //
私の言ったことを〔誰も〕信ぜず、ひとは〔輪廻の〕流れに自ずと沈む。

andhā kahai andhā patiyāya / jasa vesyā ke lagana dharāya //
盲者が言えば盲者は信用する、遊女の婚姻ができるようなもの。

so to kahiye aiso abūjha / khasama ṭhāṛha ḍhiga nāhiṃ sūjha //
そう言う者はとても愚かで、夫がすぐ傍にいても気づかない。

āpana āpana cāhaiṃ māna / jhūṭha parapañca sāmca kari jāna //
ひとは各々の名誉を望み、偽りの妄語を真正と言う。

jhūṭhā kabahuṃ na karihaiṃ kāja / hauṃ barajauṃ tohi sunu nilāja //
偽りは決して利益をなさず、私は汝を止める、聞け、恥知らずよ。

chāmṛahu pākhaṇḍa mānahu bāta / nahiṃ to parabahu jama ke hātha //
虚偽を棄てよ、〔私の言う〕ことを認めよ、そうでなければ閻魔の手に
堕ちよう。

kahahi kabīra nara kiyo na khoja / bhaṭaki muala jasa bana kā rojha //
カビールは言う、ひとは〔真実在を〕探さず、荒野の羚羊のように迷っ
て死んだ。